

ジェファソンは偽善者か？

— アメリカ民主主義と奴隷制 —

早 瀬 博 範

Is Jefferson a Hypocrite? : American Democracy and Slavery

Hironori HAYASE

[Summary]

This paper aims to clarify the real image of Thomas Jefferson through a close analysis of his writings, and to reveal how paradoxical American democracy has been in its initial period of the founding of the United States. Jefferson is regarded as a top-rank democratic and equalitarian American, thinking “All men are created equal,” and condemning the slavery in the new nation in his first draft of the Declaration of Independence, though his idea is not accepted by the Congress. As a big planter in Virginia, on the other, he has possessed about 200 slaves all through his life, and his writings show he has a racist-like prejudice about black people. Is he a hypocrite or not? To answer the question, the paper discusses who he is as a politician and an individual, and finally considers some reasons why he gives up his idea.

はじめに

W. E. B. デュボイスが *The Souls of Black Folk* (1903) において、「20世紀の問題はカラーラインの問題である」(5)と言ったのは有名である¹が、アメリカの黒人活動家で哲学者でもある、コーネル・ウェストが、20世紀が終わりに差し掛かっている1993年に出版した *Race Matters* の序論において、デュボイスの言葉を踏襲し、「21世紀の問題も未だにカラーラインが問題である」と、次のように訴えている。

Yet the fundamental litmus test for American democracy—its economy, government, criminal justice system, education, mass media, and culture—remains: how broad and intense are the arbitrary powers used and deployed against black people. In this sense, the problem of the twenty-first century remains the problem of the color line. (West xiv)

アメリカの抱える黒人問題の根深さを改めて感じさせる象徴的台詞である。

アメリカの黒人問題を考えるとき、良くも悪くもトーマス・ジェファソンがスタートである。彼は、第

3代大統領としてアメリカ民主主義の基盤を築き、「独立宣言書の草稿」に見られるように、奴隷制は自然法に反する制度として廃止すべきだという理念を持った平等主義者である。しかしながら、一方では、広大なプランテーションの領主として多くの奴隷を所有しており、さらに、その著『ヴァージア覚書』(*Notes on the State of Virginia*)でも、「黒人は、白人に比べて、知能、精神、肉体は劣る」(245)など、人種差別ともとれる表現も多数散見される。果たして、どちらの顔が本当のジェファソン像なのか。理念と現実が異なる偽善者なのか。それとも、両者の間に何らかの論理的な一貫性が見出せるのか。

本論では、この質問に答えるために、ジェファソンの残した文献を詳細に分析するとともに、歴史的な政治的背景も視野に入れ、ジェファソンの実像を浮き彫りにするとともに、アメリカ民主主義の実態を考察する。

1. ジェファソンの理念

(1) 奴隷解放の理念

1776年6月11日に、ジェファソンは独立宣言書の草稿委員に選出され²、ついで草稿の原案を書くことを命じられた。出来上がった草稿は少し字句の修正を経て、大陸会議にかけられた。その大陸会議では大幅な削除作業が行われ、奴隷制度に関わる部分は削除された。削除されたのが以下の部分であり、現在の『独立宣言書』にはない。

he has waged cruel war against human nature itself, violating it's most sacred rights of life & liberty in the persons of a distant people who never offended him, captivating and carrying them into slavery in another hemisphere, or to incur miserable death in their transportation thither. This piratical warfare, the opprobrium of *infidel* powers, is the warfare of the CHRISTIAN king of Great Britain. Determined to keep open a market where MEN should be bought and sold, he has prostituted his negative for suppressing every legislative attempt to prohibit or to restrain this execrable commerce. And that this assemblage of horrors might want no fact of distinguished die, he is now exciting those very people to rise in arms among us, and to purchase that liberty of which *he* has deprived them, by murdering the people upon whom *he* also obruded them : thus paying off former crimes committed against the *liberties* of one people, with crimes which he urges them to commit against the *lives* of another. (“A Declaration by the Representatives of the United States of America, in General Congress Assembled”)

ここでは、アメリカの奴隷制はイギリス国王がもたらしたものであり、「最も神聖な生命と自由の権利を犯す」(violating its most sacred rights of life and liberty)のもので、「人間性自体に対する残忍な戦争行為」(cruel war against human nature)であると強く糾弾されている。現在、『独立宣言書』に関しては、有名な冒頭部分の「すべての人間は生まれながらにして平等」があるにもかかわらず、奴隷制廃止への具体的な言及がないために、思想の一貫性のない文書と言われるが、少なくともジェファソンの記した草稿においては、自然法に則り³、奴隷制がアメリカにとっては排除すべき課題であると明確に指摘されており、思想的な一貫性はあったのである。

しかしながら、大陸会議では奴隷制がアメリカにあるのはイギリスだけの問題でないという事実と、奴隷制に頼っている州からの強い反対があり⁴、ジェファソンの思いは却下されてしまう。その結果、高らかに平等主義を謳いながらも、奴隷制には触れない矛盾に満ちた『独立宣言書』が誕生する。ジェファソ

ンは、『自叙伝』の中ではその削除された部分がはっきりとわかる形で自分のオリジナルの「草稿」を掲載し、「人の考えというものは、その人が受け入れたものだけでなく、拒絶したものでも分かるものだ」(*Autobiography* 30) と不満を述べている。平等主義や自由主義を旗印にした民主主義国家が、奴隷制を存続させるという「大いなる矛盾」でスタートし、それが長い間存続することになる。この点が、アメリカ独立革命の限界でもあった⁵。

このように、この時期のジェファソンが、奴隷制は廃止すべきものであると考えていたことは事実であり、そのための政治的な動きをしていたことも確かである。「草稿」を書く2年前に書かれた「イギリス領アメリカの諸権利についての総括的見解」においても、「奴隷廃止はアメリカの大いなる目標 (the great object of desire)」(“A Summary View of the Rights of British America” 115) と、すでに明確に述べている。さらに、彼はヴァージニア邦においては、奴隷制は「共和主義とは両立をしない」(inconsistent with Republicanism; *Notes on the State of Virginia* 147) として、その廃止のための法改訂を行うべきだと考えていた。ジェファソンの著書『ヴァージニア覚書』(*Notes on the State of Virginia*) には、以下のように奴隷制廃止の提案をする準備ができていたことが明確に記されている。

To emancipate all slaves born after passing the act. The bill reported by the revisors does not itself contain the proposition; but an amendment containing it was prepared, to be offered to the Legislature whenever the bill should be taken up....(148)

さらに、続けて、廃止後の具体的なプロセスまで記されている。

they should continue with their parents to a certain age, then to be brought up, at the public expense, to tillage, arts or sciences, according to their geniuses, till the females should be eighteen, and the males twenty-one years of age, when they should be colonized to such place as the circumstances of the time should render most proper, sending them out with arms, implements of household, and of the handicraft arts, seeds, pairs of the useful domestic animals, &c., to declare them a free and independent people, and extend to them our alliance and protection, till they shall have acquired strength.(148-49)

つまり、子どものうちに、耕作、芸術、科学などの教育も無償で提供し、女性は18歳、男性は21歳に達したら、「自由な独立した人民であることを宣言して」(declare them a free and independent people)、必要な所帯道具や家畜を与えて適当な場所へ送り出し、彼らが十分な力 (strength) を得るまでは保護する、というものである。

さらに、彼が晩年に書いた『自叙伝』(*Autobiography*) からも、次のように黒人の自由を自明のことと考えていたことがわかる。

Nothing is more certainly written in the book of fate than that these people are to be free.(77)

以上のように、彼の残した記述を見る限り、ジェファソンは生涯を通じて「黒人も自由な民」であるという政治的には平等の理念を持ち続けていたことは事実として認めてよいであろう。

(2)分離主義に基づく奴隷解放案

しかしながら、その「自由を与える方法」に問題がある。例えば、上記の引用のすぐ後に、以下のように、ジェファソンは、白人と黒人が同じ政府のもとで一緒に生活していくことは不可能であると考えていた。

Nor is it less certain that the two races, equally free, cannot live in the same government. Nature, habit, opinion has drawn indelible lines of distinction between them. It is still in our power to direct the process of emancipation and deportation peaceably and in such slow degree as that the evil will wear off insensibly, and their place be *pari passu* filled up by free white laborers. (*Autobiography* 77)

白人と黒人が一緒に住めない理由として、ジェファソンは、「性格、習慣、意見」が明確に違うという点を挙げている。従って、黒人を解放した後は、合衆国以外の土地に送り出すということを提案している。同様の考えは、『ヴァージニア覚書』にも見ることができる。

and to send vessels at the same time to other parts of the world for an equal number of white inhabitants; to induce whom to migrate hither, proper encouragements were to be proposed. (149)

黒人を解放した後、船で海外へ送り出し、同数の白人を入れるというアイデアである。いわゆる分離主義的な平等主義である。

このように黒人を海外に移住させてしまうという考え方はアメリカの政治家たちには意外と根強く見られ、ジェファソンだけが特殊ではない。1816年にはそれを具体的に斡旋する「アメリカ植民地協会」(American Colonization Society)も設立されている。この組織には、ジェファソンを始め、ジェイムズ・モンロー、ジェイムズ・マディソン、エイブラハム・リンカーンなどの大統領職を務めた大物政治家も主要メンバーとして属していた。実際、1815年には、38名の自由黒人奴隷が西アフリカのシエラ・レオネに移送されている。

このようなやり方が民主主義国家を標榜するアメリカでこの当時考えられていたとなれば、アメリカの当時の民主主義が白人本位の身勝手な考えに基づいていたと言わざるをえない。

分離主義を説く理由を『ヴァージニア覚書』では次のように説明している。

Deep-rooted prejudices entertained by the whites; ten thousand recollections by the blacks of the injuries they have sustained; new provocations; the real distinctions which Nature has made; and many other circumstances, will divide us into parties, and produce convulsions, which will probably never end but in the extermination of the one or the other race. (149)

白人によってこれまで被った根深い偏見 (deep-rooted prejudices) や、黒人が受けた何万もの虐待の記憶などが、混乱 (convulsions) をもたらし、それはどちらかが根絶する (extermination) まで続くものだと、ジェファソンは危機感を募らせている⁶。さらに、以下のように、黒人たちが急速に増加し、白人の人口を追い越すのではないかという点にも警戒している。

296,852, the number of free inhabitants, are to 270,762, the number of slaves, nearly 11 to 10. Under the mild treatment our slaves experience, and their wholesome, though coarse food, this blot in our country increases as fast, or faster. (*Notes* 95)

最終的に奴隷制は廃止すべきだが、それは奴隷制が、白人と黒人の間に最も過酷な専制と屈辱的な服従の関係を作り上げてしまい、結果、それが白人種の生活様式まで悪影響を与えることになりかねないから、とジェファソンは説く。事実、以下のホームズへの手紙で告白しているように、この点をかなり警戒していて、「夜の火事を知らせる半鐘のように」(like a fire bell in the night) 恐怖感でいっぱい夜も眠れないで、まさに合衆国は「オオカミの耳を掴んだ」(have the wolf by the ears) 危うい状態だと感じていたようである。

But this momentous question, like a fire bell in the night, awakened and filled me with terror. I considered it at once as the knell of the Union.... But, as it is, we have the wolf by the ears, and we can neither hold him, nor safely let him go. Justice is in one scale and self-preservation in the other. ("A Letter to John Holmes" 1434)

奴隷制のもつ悪癖を述べてはいるが、それを廃止すべき理由は、黒人の人権のためというよりも、白人のためである。

There must, doubtless, be an unhappy influence on the manners of our people, produced by the existence of slavery among us. The whole commerce between master and slave is a perpetual exercise of the most boisterous passions, the most unremitting despotism on the one part, and degrading submissions on the other. Our children see this, and learn to imitate it; for man is an imitative animal. (*Notes* 173-74)

自然法に反するそのような制度は優れた白人種には似つかわしくなく、それがこのまま続くようであれば、白人種に汚点を残すと言っているように聞こえる。白人中心の、身勝手に他人事のように聞こえる理由付けである。

これまで見てきたように、確かにジェファソンは、「人間は生まれながらにして平等である」という理念をもっており、奴隷制度は廃止すべきだという進歩的な考えに基づき法整備をしようと試みていたことも事実である⁷。しかしながら、その廃止の理由は、奴隷制度が白人種に与える危機的事態への危惧であり、しかも最終的に目指すのは、白人種と黒人種の完全な分離なのである。これは、当時の民主主義のパラドックスである。

2. 現実のジェファソン

(1) 奴隷主としてのジェファソン

政治の世界で奴隷制廃止を求めるジェファソンが、実は広大なプランテーションを所有する大プランターで、多くの奴隷を抱えていたことは、すでによく知られている。ジェファソンが丹念に記録をとっていた *Farm Book*⁸ をもとに、所有していた奴隷の数と土地について具体的に年代順に表にすると次頁のようになる。

年	奴隷の人数 (人)	土地 (エイカー)	
1757	20	約5,000	父から土地と奴隷を相続。
1774	187	約16,000	母や義父から奴隷を相続。 義父からは土地11,000エイカーを相続。
1783	204	約10,000	借金のため土地6,000エイカー売却。
1794	154	約10,600	債務のため50人以上の奴隷を売却。
1810	200	約10,004	

『独立宣言書』を起草した頃にも、相続した財産とはいえ、200名近くの奴隷を所有していたことは事実であるし、死亡するまで彼の農園には常時200名前後の奴隷が働いていたことになる。農園はヴァージニアでも広大なプランテーションであり、経済的にも第2位に位置するほどの裕福さを誇っていたようである。『大奴隷主・^{タバコ}麻薬紳士ジェファソン』の著者山本は、ジェファソンにとって「政治（公）などは従で、大奴隷主・^{タバコ}麻薬プランター（私）こそが本業であった」（43）として、彼の実像に迫ろうとしている。しかも、彼が解放した奴隷はわずか7名で、ほとんどが彼と女奴隷サリー・ヘミングスの関係者である⁹。もっとも奴隷を所有した当時の「偉人」はジェファソンだけではない。大統領経験者だけに限っても、初代ジョージ・ワシントンから18代ユリシーズ・グラントまでのうち12名の大統領が奴隷を所有していた（Lopresti）。ワシントンも同じくヴァージニアのマウント・バーノンで約300人の奴隷を所有し¹⁰、4代ジェームズ・マディソン、7代アンドリュー・ジャクソン、9代ウィリアム・ヘンリー・ハリソン、10代ジョン・タイラーも黒人奴隷農園主であった。初期のアメリカのファウンディング・ファーザーと呼ばれる政治家たちは、政治的には奴隷解放を考えながらも、自らの生活を営む上では奴隷制度を手放すことはできなかったようで、アメリカ民主主義が当時いかに理念だけで走っていたかを物語っている¹¹。このように富裕層が奴隷制を基盤として成り立っていたアメリカにおいて、理念だけで奴隷制を廃止するのはかなり困難な作業が伴うことは事実であったと思われる。

当時、奴隷主であったということだけで、ジェファソンだけを非難することはできないかもしれない。しかしながら、高らかに「すべての人間は生まれながらに平等」とアメリカ建国の精神にまで掲げた張本人が、実は大プランテーションの奴隷主であったという事実は、偽善者と言われても仕方がないかもしれない¹²。

(2)ジェファソンの黒人観

むしろジェファソンに向けられる非難の矛先はもっと根本的なところにある。それは彼の黒人観である。『ヴァージニア覚書』には、これまで見てきたように奴隷を解放しようという理念が描かれていることは事実であるが、黒人に対してかなり偏見に満ちた分析を行っている。例えば、知性や精神活動に関して白人と黒人を比べた場合、以下のように明確に差異があると述べている。

Comparing them by their faculties of memory, reason, and imagination, it appears to me that in memory they are equal to the whites; in reason much inferior, as I think one could scarcely be found capable of tracing and comprehending the investigations of Euclid; and that in imagination they are dull, tasteless, and anomalous... But never yet could I find that a black had uttered a

thought above the level of plain narration ; never saw even an elementary trait of painting or sculpture. (*Notes* 150-51)

記憶力は白人も黒人も同レベルであるが、理性に関しては黒人はかなり劣る (much inferior) し、ユークリッドの研究はほとんど理解できないと述べている。想像力も鈍くて、味気なく、変である (dull, tasteless and anomalous) と見ており、単純な話以上の思想などを語っている姿など見たこともなく、初歩的な絵画や彫刻も無理だと見ている。

身体的な「美しさ」に関しても、以下のように、肌の色も体型も白人種の方が美しいのは当然で、それは「自然によって決められたこと」 (fixed in Nature) と見なしている。

the difference is fixed in Nature, and is as real as if its seat and cause were better known to us. And is this difference of no importance? Is it not the foundation of a greater or less share of beauty in the two races? Are not the fine mixtures of red and white, the expressions of every passion by greater or less suffusions of color in the one, preferable to that eternal monotony which reigns in the countenances, that immovable veil of black which covers all the emotions of the other race? Add to these flowing hair, a more elegant symmetry of form, their own judgment in favor of the whites, declared by their preference of them, as uniformly as is the preference of the Oranootan for the black women over those of his own species. (*Notes* 149-50)

白人種の白い肌に赤みが差した色合い (mixture of red and white) は、黒人種のどこまでも無表情な (eternal monotony) 黒さより好ましいと述べ、白人女性の流れるような髪やエレガントで均整の取れた体型 (flowing hair, a more elegant symmetry of form) を黒人男性が好むのは、オランウータンが種を超えて、黒人女性を好むのと似ているという比喩まで持ち出して、白人種の美的優位性を「自然なこと」として説明している。ジェファソンが生物学に関してどの程度の知識があったかは定かではないが、偏見に満ち、その表現も品位を欠いている。ジェファソンが黒人を劣性な人種であると見ていたことを如実に表している。それは、以下の説明でより明確になる。

I advance it therefore as a suspicion only, that the blacks, whether originally a distinct race, or made distinct by time and circumstances, are inferior to the whites in the endowments both of body and mind. It is not against experience to suppose that different species of the same genus, or varieties of the same species, may possess different qualifications. Will not a lover of natural history then, one who views the gradations in all the races of animals with the eye of philosophy, excuse an effort to keep those in the department of man as distinct as Nature has formed them ? (*Notes* 155)

同じ種類の生物でも、品種によって差異があるのは生物学的にはよくあることなので、人間種においても、心も体も両方とも、生まれながらの資質としては、黒人種は白人種より劣るのは経験上問題のない (not against experience) として理解でき、それは「自然が作り出した」 (Nature has formed them) ことという理解である。

ここで注目すべきは、このような白人と黒人の差異は「自然が作り出した」こと、と彼が考えている点

である。別の箇所ではもっと明快に述べている。

It is not their condition then, but Nature, which has produced the distinction. (Notes 154)

ジェファソンは「人間は生まれながらにして平等」と説くもの「自然法」に基づいた理念であったと考えられているが、白人種と黒人種の間には明確な差異があるのも、同様の考えに基づいていると言える。つまり、「自然」は人類を平等に作っているが、白人種と黒人種としては差異をつけたのだという認識である。結果、両者の差異があるのは「自然が作り出したもの」で、自分の認識は人種差別ではないという自己正当化しているようである。この点に関して、清水は、ジェファソンを「人間生来の自然」を徹底した思想家と見ているが、彼の中では「平等主義と差別主義とが自然（資質）をベースにして逆説的に背中合わせの形でリンクされている」（5）と説明する。

彼の黒人観は、冷静に理路整然と説明されているようであるが、その根底には黒人への人種偏見があることは疑問の余地がない。確かに当時の多くの白人の声を代弁しているというのも事実であるが、それを文字化し本としている出版している影響は計り知れない。少なくとも現在の目で見れば、以下のオブライエンが言うように、彼はレイシストと言われても仕方がない¹³。

Thomas Jefferson is becoming a most unsuitable and embarrassing figure in the pantheon of the modern American civil religion. For Thomas Jefferson was demonstrably a racist, and a particularly aggressive and vindictive one at that. (O'Brien 68)

彼の私的な面を知れば知るほど、その印象は拭えない。ヴァージニアでも最大規模のプランテーションのオーナーとして常時200名前後の黒人奴隷を称した大プランターで、生涯奴隷をほとんど解放することがなかった。さらに、彼の黒人観も人種偏見に満ちている。偽善者やレイシストと非難されても仕方がない事実がある。

3. 政治家ジェファソン

ジェファソンは、『独立宣言書』の冒頭部で「人間は生まれながらにして平等」というフレーズを掲げたアメリカ民主主義の根幹を築いた人物である。しかも実際に「独立宣言書の草稿」では、奴隷制はアメリカの汚点（blot）であり排除すべきだと記している。しかしこれに関する文言は、アメリカ経済が未だ奴隷制を手放せないという経済事情から最終案では削除され、彼の奴隷制廃止の夢は大きく遠のいた。さらに、ヴァージニアでも奴隷制廃止の法改正を議会に提出するが、やはり同様に理由で陽の目をみることはなかった。結果、彼は奴隷廃止という課題は、政治、道徳、歴史など様々な視点からみて、目下達成することは不可能（impossible）であると結論づける。

But it is impossible to be temperate, and to pursue this subject through the various considerations of policy, of morals, of history, natural and civil. We must be contented to hope they will force their way into every one's mind. (Notes 175)

ジェファソンの大統領在職中の1808年には、奴隷の輸入の禁止に関しては法整備を行うが、解放までは実現できなかった。最終的には、以下の『自叙伝』に見られるように、奴隷制廃止は当時のアメリカにあって

ては、大衆 (the public mind) が問題で、時期尚早だったと結論づけている。

But it was found that the public mind would not yet bear the proposition, nor will it bear it even at this day. Yet the day is not distant, when it must bear and adopt it, or worse will follow. (*Autobiography* 77)

奴隷制廃止を実行に移すには、難しい時代であったことは確かであるが、この言葉は自己弁護に聞こえる。ジェファソンの思想形成と彼の実態を詳細に調査した明石紀雄も、『モンティチェロのジェファソン』の中で「ジェファソンの奴隷制反対の立場はレトリックのレベルに留まっていたことを認めなければならない」(136)と結論づけている。

ジェファソンの個人的な認識や生活実態から、偽善者やレイシストと片付けていいかもしれないが、アメリカ合衆国という新しい民主主義国家を建国し、その理念の根幹を作った政治家ジェファソンが、やはり奴隷制廃止、奴隷解放を実現できなかった責任は大きいのではないだろうか。個人的な認識や見解がどうあれ、政治家の信条として奴隷制廃止を掲げたのであれば、それを実現するための最大限の努力をもつとすべきだったのではないか。新しい国の建国の時期こそ、最も解決できたタイミングであり、大統領職も2期務めている。当時、ジェファソンほど様々な学問分野にも長け、フランス革命など海外の情勢にも精通し、新しい政治理念をもっていた政治家はいなかった。さらに奴隷主として奴隷の惨状も熟知していたはずである。この時に奴隷解放が実現していれば、その後の黒人の長くてつらい苦しみがどれだけ軽減されていたことかと思わざるをえない。その意味で、フィンケルマンも厳しく非難しているように、ジェファソンは「世界の希望に対して反逆罪」(treason against the hopes of the world)と言えるほどの重罪を犯したと言ってよい。

Yes, there had been “treason against the hopes of the world.” The treason was by that generation which failed to place the nation on the road to liberty for all. No one bore a greater responsibility for that failure than the author of the Declaration of Independence—the Master of Monticello. (Finkelman 211-12)

ジェファソンが奴隷制廃止を断念したのは「政治家としての判断」だったと見るべきである。当時のアメリカの経済状況、政治状況を考えれば、政治家としては、現実路線を選ばざるをえなかったということなのだろう。それでも、『独立宣言書』の根本理念を書いた政治家が、結局、言葉だけで終らせてしまった、その責任は大きいと言わざるをえないし、そこに彼の限界があった。

最後に

ジェファソンは『独立宣言書』の起草を通して、アメリカが進むべき道を示した。自らも奴隷制廃止を目指して法案提出をしたりして実現に向けて画策を行った。しかし現実には、リンカーンが奴隷解放宣言を出すまでにアメリカは100年も費やした。当時、奴隷制に大きく依存した経済体制にあったアメリカにおいてその廃止は時期尚早で難しかったかもしれないが、ジェファソンはそれができる信条と権力を有していたはずである。現実重視の路線に流されてしまった政治家であったと見なさざるをえない。ジェファソンは、確かに理念と現実が乖離した偽善者と言ってもいいが、彼は良くも悪くも白人社会の代弁者であり、その意味では、アメリカ社会全体が黒人問題に関しては偽善的であったと言えるだろう。

この事実はアメリカ民主主義が理念だけで極めてパラドクシカルであり、独立革命の限界を露呈している。このような建国時の矛盾や偽善がその後長い間黒人を苦しめる結果を産んだことは間違いない。

NOTES

- 1 デュボイスは、さらに彼は「ヴェールの内側に生きている」(love within the Veil; 6)と述べているが、黒人と白人の間に存在する壁を「カラーライン」と言ったり、「ヴェール」呼んだりしていることがわかる。この表現は、ジェファソンが『ヴァージニア覚書』で、黒人の黒い肌のことを「すべての感情を覆い尽くす取り外すことのできない黒いヴェール」(immovable veil of black which covers all the emotions; 149)と形容しているのを受けて使っていると考えられる。
- 2 ジェファソンを含めて5名の草稿委員が選出された。後の4名は Benjamin Franklin, John Adams, Roger Sherman, Robert R. Livingston である。その中でも文章力に秀でていて、みんなの信頼も厚かったようで若いジェファソンに原案作成を命じられようである。John Adams は『自叙伝』に“Resolved, That the committee for preparing the declaration consist of five. The members chosen, Mr. Jefferson, Mr. John Adams, Mr. Franklin, Mr. Sherman, and Mr. R. R. Livingston. Jefferson was chairman, because he had most votes; and he had most votes, because we united in him to the exclusion of R. H. Lee, and to keep out Harrison.” (Adams, *Diary and Autobiography*, 52)と記している。
- 3 ジェファソンの政治思想の基盤は、これまでイギリスのジョン・ロックの著作『統治二論』だったと考えられてきたが、明石は『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』において、フランシス・ハッチンソンなどの「スコットランド道徳哲学派」との関連での研究が進んでいると紹介している(224)。
- 4 この部分の削除に関しては、サウス・キャロライナとジョージアが奴隷制を維持したいとして反対したことと、北部に関してもほとんど奴隷は所有していないが、大規模な奴隷の輸送にかかわっていたためだと、ジェファソンは『自叙伝』に記している(33)。当時の状況に関しては、安武も「独立運動の指導者の多くが奴隷制農場経営に従事しており、北部の商人たちも奴隷貿易に関与していた事実を鑑みて、彼らが歴史的に奴隷貿易による恩恵を受けていたことは否定しがたく、この削除は当然の成り行きであった」(102)と説明している。
- 5 島川は、アメリカに奴隷制があることをイギリス国王の責任している点に関して、「奴隷所有者=購入者であるアメリカが、奴隷解放主義者であった、という形容矛盾的表現が、事実誤認あるいは意図的なものであることは論を待たない。ここに、アメリカ独立革命の限界と、ジェファソン自身に発想形式が典型されている」(21)と鋭く指摘している。
- 6 1780-1804年には、サン・ドマングでは黒人奴隷の反乱によってフランスから独立し、ハイチ共和国を樹立させた。このハイチ革命はアメリカの黒人奴隷たちを刺激した。他にも、1712年、1741年のニューヨークでの反乱、1739年ノース・キャロライナでのストノの反乱、1800年のヴァージニアでのガブリエルの反乱、1811年のルイジアナでのチャールズ・デスランズの反乱など、当時、黒人奴隷による暴動が多数起こっている。
- 7 明石は『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』の中で、「人はすべて」というとき、「黒人奴隷は念頭に置いておかなかったのは明らか」(227)と結論づけている。
- 8 1774年1月から死亡する1ヶ月前の1826年5月までの農園の運営に関するジェファソン自身による詳細な手書きの記録である。全体で379ページからなるが、最初の177ページが農園経営に関する記録で、後半は手紙や出納帳やメモ書きある。しかし多くのページが欠損している。Betts がファクシミリ版を出版している。本稿では Betts 版を使用。
- 9 サリー・ヘミングスとジェファソンの関係については、最初の大統領選挙の際に取りざたされたのが最初である(本文末に掲載の Chronology of Thomas Jefferson では1802年の出来事)。ジェファソンは沈黙を保っていた。1998年 *Nature* 誌でDNA鑑定で血縁関係ありと断定された。それを受け、1999年にはヘミングス家の家族34名が初めてモンティチェロへ招待された。彼女に関しては、文学的想像力を刺激するようで、アフリカン・アメリカンによる最初の小説として評価も高い William Wells Brown の *Clotel* (1853)、サリーを奴隷であるが、愛に生きた女性として描いた Barbara Chase-Riboud の *Sally Hemings* (1979) と *The President's Daughter* (1994)、そして黒人問題をアメリカの本質的な問題という観点から描いた Steve Erickson の *Arc d'X* (1993) などで小説化されている。
- 10 ワシントンは、遺言で奴隷の解放を述べている。
- 11 安武は、初期の大統領としてヴァージニアの奴隷を有する大農園主が続いた理由を次のように説明している。「奴隷制大農園主こそが、生産労働や日常的ビジネスから解放され、しかも土地と奴隷という莫大な恒産を所有しているがゆえに、政治に私利をもちこまないですむと期待されていたという点で、連邦政治を委ねる名望家としては最もふさわしい人々であった。これがワシントン政権から『ヴァージニア王朝』末期までの36年間のうち32年間も奴隷主大統領が続いた理由の1つでもあった」(107)

- 12 サリー・ヘミングスの子孫の一人で現在、詩人として活躍をしているテス・テイラーの詩「モンティチェロからのジェファソンへの手紙」の中には、“O hypocrite—you make me tired./ Like Whitman, you contradict yourself.”という1節があるようだ。詳細は塩田97を参照。
- 13 山本も「ジェファソンはレイシストであった」(325)や、彼の黒人の海外棄民の考えに対しても「強烈なレイシストだった」(326)と痛烈に批判している。

Works Cited

- Adams, John. *The Works of John Adams, vol. 3 (Autobiography, Diary, Notes of a Debate in the Senate, Essays)*. 1851. Online Library of Liberty.
 < http://files.libertyfund.org/pll/pdf/Adams_1431-03_EBk_v7.0.pdf >. Web. 30 Oct. 2016.
- Betts, Edwin Morris, ed. *Thomas Jefferson's Farm Book: with Relevant Commentary and Extracts from Other Writings*. Princeton: Princeton UP, 1953. Print.
- Brown, William Wells. *Clotel; or, the President's Daughter: A Narrative of Slave Life in the United States*. Ed. Robert S. Levine. 1853. New York: Bedford/St. Martin's, 2000. Print.
- Chase-Riboud, Barbara. *The President's Daughter*. Philadelphia: Crown, 1994. Print.
- . *Sally Hemings*. 1979. London: Virago, 2002. Print.
- Cohen, William. “Thomas Jefferson and the Problem of Slavery.” 1969. Instituto de Estudos Avancados da Universidade de Sao Paulo. < <http://200.144.254.127:8080/iea/english/journal/38/cohenjefferson.pdf> >. Web. 30 Oct. 2016.
- Du Bois, W.E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903. New York: Norton, 1999. Print.
- Erickson, Steve. *Arc d'X*. New York: Henry Holt, 1993. Print.
- Finkelman, Paul. “Jefferson and Slavery: ‘Treason Against the Hopes of the World.’” *Jeffersonian Legacies*. Ed. Peter S. Onuf. Charlottesville: UP of Virginia, 1993. 181-221. Print.
- Jefferson, Thomas. “A Letter to John Holmes.” (April 22, 1820).
 < <http://teachingamericanhistory.org/library/document/letter-to-john-holmes/> >. Web. 30 Oct. 2016.
- . *Autobiography of Thomas Jefferson 1743-1790*. An Introduction and Notes by Paul Leicester Ford. New York: Putnam's Sons, 1914. < <https://archive.org/details/autobiographyoft00jeff> >. Web. 30 Oct. 2016.
- . “Jefferson's Original Rough Draft of the Declaration of Independence.” *The Papers of Thomas Jefferson*, Vol. 1: 1760-1766. 423-428. Web. 30 Oct. 2016.
- . *Notes on the State of Virginia*. 1753. Richmond, Va: J. W. Randolph.
 < <https://archive.org/details/notesonstateofvi01jeff> >. Web. 30 Oct. 2016.
- . “A Summary View of the Rights of British America.” 1774. *Thomas Jefferson: Writings*. New York: Library of America, 1984. Print.
- Lopresti, Rob. “Which U. S. Presidents Owned Slaves?” *ChickenBones*. (22 February 2011). Web. 30 Oct. 2016.
- O'brien, Conor Cruise. “Thomas Jefferson: Radical and Racist.” *Atlantic Monthly* 274 (1996): 53-74. Print.
- West, Cornel. *Race Matters*. 1993. New York: Random House, 2001. Print.
- 明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』ミネルヴァ書房 1993.
- 『モンティチェロのジェファソン—アメリカ建国の父祖の内面史—』ミネルヴァ書房 2003.
- 塩田弘「テス・テイラー『飼料小屋』(*The Forage House*)における歴史観の形成—トマス・ジェ

- ファーソンの DNA と人種問題をめぐって—」『広島修道論集』55(2015)：91-102. Print.
- 清水忠重「トマス・ジェファソンの人間本性論・共和国・ニグロ奴隷論」『同志社アメリカ研究』27(1991)：1-10. Print.
- 島川雅史「ジェファソンと“黒人”奴隷制」『史苑』36(1975)：19-38. Print.
- 安武秀岳『自由の帝国と奴隷制—建国から南北戦争まで』ミネルヴァ書房 2011.
- 山本幹雄『大奴隷主・麻薬紳士ジェファソン—アメリカ史の原風景』阿吽社 1994.

〈〈資料〉〉

Chronology of Thomas Jefferson

- 1607 Jamestown founded
- 1614 Black slavery introduced in Virginia
- 1743 Thomas Jefferson born
- 1760 Enters the college of William & Mary(-67)
- 1764 Inherits 2,750 acres
- 1769 Begins building Monticello
Member of the House of Burgesses(-76)
- 1772 Marries Martha Wayles Skelton
- 1773 Sally Hemings comes to Monticello. Comes into possession of 11,000 acres of land and 135 slaves on the death of John Wayles. Sells half the land to meet debts.
- 1774 *A Summary View of the Rights of British America*
- 1775 Member of the Continental Congress(-76)
- 1776 Makes a draft of the *Declaration of Independence*
- 1779 Governor of Virginia(-81)
- 1782 Martha dies
- 1784 Minister to France(-89)
- 1785 *Notes on the State of Virginia*
- 1787 Sally goes to France with Maria, Jefferson's daughter
- 1788 *Constitution* ratified
- 1789 George Washington's Administration(-97)
- 1789 Secretary of State(-93)
- 1793 Fugitive Slave Law
- 1797 John Adams's Administration (-1801) Jefferson becomes Vice- President
- 1801 Jefferson's Administration(-09)
- 1802 "The President Again" by James Callender in *the Richmond Recorder*
- 1803 Louisiana Purchase
- 1808 Importation of slaves prohibited
- 1809 James Madison's Administration(-17)
- 1817 James Monroe's Administration(-25)
- 1821 Writes *Autobiography*
- 1824 Opens the University of Virginia to students
- 1825 John Quincy Adams's Administration(-29)
- 1826 Jefferson dies